

ことぶきしきさんばそう すず だん
寿式三番叟 鈴の段

「解説」

天下泰平、五穀豊穰を祈願する能の「翁」を、特に三番叟の部分に重点をおいて、義太夫節に取り入れたご祝儀曲です。千歳、そして能の中でも最も神聖視される翁、及びその後半で狂言方による三番叟（三番目の老人という意味）の舞から成りたっています。

元来は仏教に関係していたようですが、翁は天照大神、千歳は春日大明神、三番叟は住吉大明神を象徴すると伝えられています。

五穀豊穰を祈願する三番叟の舞からは人形浄瑠璃らしく、にぎやかな曲にのって軽快な踊りやユーモラスな場面もあつたりで楽しめ、農耕に由来する動きも取り入れられています。田植えの振りに続いて、種蒔きのように鈴を振りながら、二人は舞台四隅を軽快に回り始めます。

次第に速度が増してきます。一人の三番叟が疲れて休むと、それを見つけたもう一人が、無理やりたたせて舞わせませす。そしてめでたく舞い納めます。



ししょう

詞章をご紹介します。

「そなたこそ」

初日は諸願満足円満、二日の日はまた二つ柱、宇津女の神子が、
一ト二タ三四、五ツ六ユ七八九の十、
百千万の舞の袖。五月のさ女房が笠の端を連ねて、早苗押取り上げて諷ふた
「千町」

「万町」

「億万町」

田をばぞんぶりぞ。田をばぞんぶりぞ。ぞんぶりぞんぶりぞんぶりぞ。
御田を植えるならば笠買ふて着せうぞ 笠買ふてたもるならば、なほも田を植えう
よ三日は福德寿福円満、子徳人の子宝、車座に並べた。たつまつ、いるまつ、かいつく、ひつつく、火打ち袋にぶらりと付けて候ぞ
これ式三番の故実にて、三日これを舞ふとかや 柳は緑、花は紅数々や、
浜の真砂は尽きるとも、尽きせぬ和歌ぞ敷島の、神の教への国津民 治まる御代こそめでたけれ。